

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	University of Pennsylvania, Philadelphia, PA, USA:フィラデルフィア留学
別タイトル	University of Pennsylvania, Philadelphia, PA, USA: Studying abroad in Philadelphia
作成者(著者)	福田, 雄介
公開者	東邦大学医学会
発行日	2014.07
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 61(4). p.202 203.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	世界の研究室から
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.61.202
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD48886059

University of Pennsylvania, Philadelphia, PA, USA

フィラデルフィア留学

福田 雄介

東邦大学医学部産科婦人科学講座 (大森)



産婦人科医局の協力のもと2012年8月よりアメリカのペンシルバニア州フィラデルフィアにあるペンシルバニア大学生物学教室で基礎研究をさせて頂いている。私の研究室(以下、ラボ)のボスであるDr Richard Schultz(以下、“Richard”と呼ぶ)はマウスの卵子、受精、受精卵に関わる研究に35年以上携わっておりその領域では有名である。ラボには日本の不妊領域で活躍している産婦人科の先生が何人も留学してきた実績もある。今回本学医学部生化学教室の村井先生にご紹介していただきRichardのラボに留学することになった。2012年の夏に渡米してこちらのラボでの“やり方”を教わりながらの実験開始、新しい生活のセットアップとあつという間に時間が過ぎていった。

週に1回行われるラボミーティングでは自分の研究の進み具合、またはジャーナルクラブからいずれか好きな方を選ぶことができ、人によってはジョブインタビューの予演を行っていた。ジョブインタビューの予演を見ているとアメリカで“上のポジション”を獲得する大変さを感じた。月に数回の外部から招いた演者によるレクチャー、また、他のDepartmentでも講演が頻繁に行われており、いろいろな話を聴くことができ刺激にもなる。山中伸弥教授と一緒にノーベル生理医学賞を受賞されたJohn Gurdon教授の講演も聴くことができた。生物学だけでもラボが40以上あり、とにかく規模が大きく圧倒される。Richardのラボにはシニアポストドク1人、ポストドク4人とPhDコースの学生1人がいる。皆自分のたどたどしい英語にも辛抱強くつき合ってくれ、“家族サービスにオススメの場所”まで教えてくれたりと、とても親切にしてくれた。

渡米して初めての半年は結果が出ず、Richardから2年で結果を出すのは難しいから方向を変えるようにと指示された。半年間やって来たことが無になるのかと思うとショックは大きかったが、Richardは『結果を出さないで日本に

帰る訳には行かないだろう』と話してくれ、何とか結果をもたして帰国させようとしてくれることに感謝した。2013年より新しい研究テーマが始まったが、どうにか形にして帰国することができそうである。

このラボには以前は日本人が数人在籍していたのだが、私が来た頃には同じDepartmentの別のラボに1人だけ在籍、その方もすぐに帰国され、ついにDepartmentの中で日本人は私1人だけという状況になった。ただ、ペンシルバニア大学の他の学部、The Children's Hospital of Philadelphia(CHOP)、Drexel大学、Temple大学、Thomas Jefferson大学と日本からの留学生は多く、日本人同士の交流もあり、他のラボの話などを聞くととても興味深い。また、家族同士で週末バーベキューパーティーなども行われ、家族にとっても充実した生活を送れているのではないかと思っている。フィラデルフィアはアメリカ東海岸に位置し、



隣のラボと一緒にDr Richard Schultz主催の食事会。中央が主催者のRichard(2014年6月)



2008年に建てられまだ新しい感じが残っている建物。私の“ラボ”は2階に入っている。地下には animal facility がある。

アメリカの独立戦争などで有名な自由の鐘やロッキーの映画で有名なフィラデルフィア美術館がある。また、少し足を延ばせば北にニューヨーク、南にワシントンD.C.と家族サービスの場所にも事欠かない。日本と違い銃社会ということもあり渡米した直後の頃はいろいろと怖い話も聞いていたため注意したが、実際には日常生活で危険を感じることはなく生活している。自分にとっても家族にとっても有意義で充実した留学生活を送ることができていると感じる。

この機会を与えてくださった東邦大学医学部産科婦人科学講座（大森）の森田峰人教授をはじめ医局員の皆様はこの場を借りてお礼を申し上げたい。